

本朝水滸傳批評  
完

13  
908



門八利18  
號908  
卷

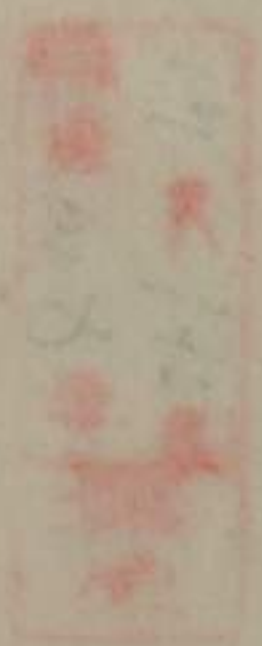
二  
八  
一  
七



本朝水滸傳を徒云云批評

曲亭馬琴

綾足の本朝水滸傳、寛政の末のしめのしのおの二本  
 を購本せし見たり、其の語、深く考くをくおん  
 たり、そのまゝをて思ひし、そのものま  
 まぎらぬをいひ、けり、かくて四十をて、その  
 けり、また見まゝ、けり、そのまゝ、江戸の  
 しみやう、あゝと、縁也と、ゆゑ、ちよみ、たや、五十  
 漸、た、まゝ、人、桂、南、あゝ、ま、志、か、く、と、か、た、い、し  
 又、ゆゑ、まゝ、う、け、い、て、ま、の、る、ま、た、十、少、て、全三冊  
全十冊  
 を、あゝ、まゝ、又、ゆゑ、の、ま、め、まゝ、う、つ、し、ま、た、十















向をかりゆえ文の字に控造るるもいひてぬるるのみを文  
のうへをいひのうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
るるもいひのうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
この和歌のうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
文の雅語をいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
たるるもいひのうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
いと世の看官のうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
ともいひのうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
あすの娘のうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
あつはるるもいひのうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
米ぶるるもいひのうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文

京傳馬琴のうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
こせしとてまつ顔みつういひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
淡飯をいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
又言物圖のうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
あみをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
けんをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
あつはるるもいひのうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
あつはるるもいひのうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
村田春のうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文  
るるもいひのうへをいひてぬるるもいひてぬるるのみを文



花のうらちの歌をみまると見ゆも何れかよふついで  
づのみまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
とみまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
る。鑑のおどしもまのうらちの歌をきしやまのうらちの歌  
見いつてもう後成思寺の歌のうらちの歌をきしやまのうらちの歌  
とみまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
をきしやまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
らまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
此者の文をのみまのうらちの歌をきしやまのうらちの歌  
のうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
いふ怪もみまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌

あつても花をきしやまのうらちのうらちの歌  
らまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
ふみまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
らまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
上りのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
子記のうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
花のうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
いと念をきしやまのうらちのうらちのうらちの歌  
のうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
はしきすまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
をきしやまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
をきしやまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌  
をきしやまのうらちの歌をきしやまのうらちのうらちの歌



の心もまたさるおるはさる此杯とあるを不揚子  
いふ子のよりけり石椀のこころのまきとものさるんは唐心  
をそは姻の折草子といひくくあり右の七六多子の  
傷るさる杯はさるさるさる似たりくくは杯はさる  
すくくいの後さる和名抄る杯は毛の注云  
桑杯言射漢法抄云至美秘所合也とり之  
又正々さる

杯の杯切言蘇杯喜業の生幹疎直其の固有夫儀  
實如椒名自木言錐木漆其未希也謂之杯其為黃  
又如子杯似杯而小有刺其の心也杯可飼春臨禮月  
今季春余野虞母伐桑拓周礼考工記取幹之道杯為

上又器也言杯葉飼杯其此作琴瑟弦法御言勝凡  
此又杯將楚辭有杯桑些漢禮樂志樂府歌秦尊  
杯將小折朝醒應助曰杯汁為飲也醒酒析解也  
方々

杯通聖氣聖方治耳龍身身有杯根酒以下  
至見之なる桑杯は子心くものさる此さつきさるといふキ  
とことさる桑杯多也又杯根酒を治就身酒と名づくま  
うんも生育の文を琴山飲か云く桑のさ蓬の矢は部  
鬼を施さる義ありいさる火の生の時こゝをもち  
四方を射て男子四方の志を表さるる礼記よ思えれ  
り道鏡阿曹丸の事朝の麻及くさるをさるはさる  
さる杯はさる百人の杯の枝は生也いさる作らる





搬したるまゝりはらふ新嘉の文ありき  
亦亦亦押印が祖王に傳したる自傳して  
巡りてあるは皇丸角丸うたわりの事なりとて  
まゝに傳へたるは城の院記をよもひの志しとて  
あるは傳へたる見ゆかゝるはたゞの心づかまひくら  
しむる事なり

亦亦亦押印が祖王に傳しとおもはれざるは猪の志あり  
めづりたるはぬいとすし且自傳の志あり押印の志あり  
成るる事なりその志ありを祖王に傳し押印を授  
けし人の押印をよもひたるはたゞの心づかまひくら  
しむる事なり其の伊吹山の墓を梁山泊に搬して根  
城にすゝむる事ありはたゞの心づかまひくら  
しむる事なり

亦亦亦押印の思ひありと祖傳しぬるの作者の志あり  
るるといふはぬいとすし且自傳の志あり押印の志あり  
成るる事なりその志ありを祖王に傳し押印を授  
けし人の押印をよもひたるはたゞの心づかまひくら  
しむる事なり其の伊吹山の墓を梁山泊に搬して根  
城にすゝむる事ありはたゞの心づかまひくら  
しむる事なり

伏候し  
亦亦亦押印の折金丸金元父子おぼへたるはたゞの  
極いなるは金丸が画たる得ぬの事なり守部おを欺













越中の國を以てその城を治りて米を移す程を  
りしといはれぬ城の精を前より道院が住い  
その力の暇分を定うと知れぬ事ありしは  
きよきとてその心をその家についである  
宮かゝる事ありしは其の御侍の爲に見  
背徳をいふ事ありし  
またその城は其の事ありしは其の御侍の爲に見  
丹の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
才人たる事ありしは其の御侍の爲に見  
以て大徳の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
博する事ありしは其の御侍の爲に見  
今世の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見

とて其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
たことありしは其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
は其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
ついでに其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
呼ぶ事ありしは其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
不存ゆえに其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
塩梅をいふ事ありしは其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
とある事ありしは其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
其の御侍の事ありしは其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
本名の内余は其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
合し其の御侍の事ありしは其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見  
いひて其の御侍の事ありしは其の御侍の事ありしは其の御侍の爲に見















著作のついでに

又いふは海軍の訓令の支那の在米の條の如  
也よの條の如きものなるは海軍の友人感志の洋  
に余の遊洋を記すものなるありしを記すこと  
いふやよきものなり初稿の如し

癸巳仲冬 再記

此の如くは海軍の訓令の支那の在米の條の如  
也よの條の如きものなるは海軍の友人感志の洋  
に余の遊洋を記すものなるありしを記すこと  
いふやよきものなり初稿の如し

癸巳仲冬 再記

